

# 河由真氏の発表論文に対するコメント

劉 成 有\*

(中国 中央民族大学)

河由真教授の論文は、『大般涅槃經集解』を中心に、南北朝期の南朝涅槃師の仏性義を集中的に論じており、重要な学術的価値がある。

魏晉南北朝は、インドから伝わった仏教が中国固有の文化的基礎の上に根をはり、芽が出た“転換”の時期である。この“転換”は、実際には晋宋の時に中国の仏学が般若中観の学から涅槃仏性の学へと転向したパラダイムシフトを体现しており、河由真教授はこのことを「中国仏教の基本思想およびその方向性が確立された時代」と述べている。たしかに本文で集中的に論じられることは、道生や僧亮ら涅槃師たちが「仏性思想および涅槃思想を受容・理解していく具体的な過程」であるが、しかしこのようなパラダイムシフトはより広汎な時代的内容を意味しているはずである。僧叡・僧肇・慧遠といった人たちがこの問題に言及するばかりでなく、関中・建康・廬山・鄴城といった地もまた高僧が活動し、仏教思想の論争があった重要な地区である。この時代は、中国仏教研究においては“富鋌”ともいえる時期なのである。たしかにこの分野ではすでに先達が重要な成果を収めている。しかしカギとなる時期のカギとなる問題は依然として多く存在している。河由真教授は「その後の中国仏教の主潮流となる仏性思想の最初期の展開の様相を捉える」という問題意識を持ってこの研究を進めており、その学術的価値は非常に突出したものと見える。

仏教の中国化は、一つの人類文明史における極めて重要かつ非常に成功した文明間対話である。この文明間対話の成功という象徴的成果は、まさに上述したパラダイムシフトであり、そしてこのパラダイムシフトのカギこそが“仏性”であると思う。インド仏教の九百年の歴史の中で生まれた豊富で深遠なさまざまな思想は、ほぼ魏晉南北朝期に一気に押し寄せてくる。大乘仏教、小乗仏教のさまざまな經典や思想に直面し、中国仏教が選

---

\*中央民族大学哲学及宗教学院院長・教授。

んだのは大乘仏教であった。さらに中観、唯識などのさまざまな経典や思想に直面し、中国仏教が選択したのは如来蔵思想であった。この「選択」自体が、まさに仏教の中国化の重要な内容なのである。なぜ鳩摩羅什が多くの精力を費やして翻訳した中観般若思想が、その地位を速やかに涅槃仏性学説に譲ってしまったのか。なぜ玄奘が将来した唯識の「真経」が（智周までの）三代までで途絶えてしまったのか。なぜインドでは決して仏教思想の主流となることのなかった如来蔵思想が中国ではより発展し輝かしいものとなったのか。河由真教授の論文は、南朝涅槃師の仏性義の中の「中国的要素の由来」や、当時の仏教思想家間の相互影響などに対する分析に基づいて、中国仏教に固有の仏性論の「起源と成立」の具体的内容を明らかにしている。この論証の過程において、河由真教授は中道と仏性の関係や、宝亮ら後期涅槃師たちに正因・縁因・生因・了因・境界因などの多様な「因」概念を動員した仏性に対する説明があったことをめぐって、道生を代表とする前期涅槃師と僧亮・僧宗・宝亮を代表とする後期涅槃師たちの仏性義の異同、および涅槃師たちが『涅槃経』を解釈する際に経典に忠実でありつつも経典を超越していった内在的な力を分析をしている。たとえば宝亮は「依」を用いて仏性を解釈しているが、河由真教授はここでの「因」が「正因を指し、『勝鬘経』によれば如来蔵である。当時の涅槃学者達が、仏性義を宗旨とする『涅槃経』だけでなく、如来蔵義を宗旨とする『勝鬘経』も共に重視していたことが分かる」としている。さらに、河由真教授は『涅槃経』の中に正因・縁因・境界因の「三因仏性」はみられず、この「三因仏性」という説は『大般涅槃経集解』の中だけにみられるものであると断定している。このような解釈は、もちろん一種の新しい発見である。私たちは、ここにまぎれもなく仏教の中国化のカギがあると考えるのである。さらに、河由真教授は宝亮が「縁因」を解釈する際に提示した「万善」の概念の分析において、宝亮をリーダーとする涅槃師たちがこの「万善」や「縁因」を非常に重視したのは、彼らが悟りの道理だけを重視したのでなく、悟りを得るための修行の過程をもやはり非常に重要なものと考えたからであるとしている。

ただし問題はまだ存在している。なぜ南朝の涅槃師たちは「中道仏性」や「三因仏性」、「万善」をとくに重視したのか。「神明」とはかなり「中国的要素」を備えた思想であるが、これ以外に、「仏性」や「万善」など

がまたどのように「中国的要素」を体現しているのか。これらの「中国的要素」は「徳性良知」、「修身齐家治国平天下」という思想からある種の解釈を得ることができるのか。さらに重要な問題は、これらの「中国的要素」が魏晋南北朝期の中国思想界において実にどのような地位から出てきたのかということである。たとえばこういった問題は、私たちが河由真教授にさらなる研究を期待するところである。

(翻訳担当：松森秀幸)